

## 「野外運動(登山)」を通して学生は何を学んだか

—ある卒業生へのインタビューからの考察—

堀出知里, 橘 直隆

### 1. 問題と目的

本学における共通科目「体育」の目標は、次のように明示されている。(1)生涯にわたってスポーツの楽しさを享受する能力を高め、自己のライフステージや心身の状態に適したスポーツを生活に取り入れ、豊かなライフスタイルを形成できる能力を身につける。(2)自己の健康・体力に対する認識を深め、健康・体力づくりのための運動方法を理解し、生涯にわたって自主的に健康・体力づくりを実践する能力や態度を高める。これらを集約すると、体育授業を通して身につけたことを生涯にわたって自主的に実践することが、本学における体育の最終的な到達点とみなせる。なお、本学において、必修科目は体育の基礎的な学習内容を学ぶためのものとして、自由科目はさらに幅広い教養としてのスポーツや健康・体力づくりの理論を習得するためのものとして、それぞれが位置づけられている。

筆者はかつて第二学群に在籍していたため、共通科目「体育」の履修経験がある。上述の目標に照らせば、現在筆者は体育授業を通して身につけたことを生涯にわたって自主的に実践する段階にある。筆者自身を振り返ると、卒業後7年を経たなお自ら継続的に参加しているスポーツ活動は登山であり、自由科

目「野外運動(登山)」で学んだことを、自主的に実践しているといえる。

そのような背景を持つ筆者が、準研究員として体育センターの業務に携わるようになり、「卒業生たちは、学生時代に体育授業を通して身につけたことを、生涯にわたってどのように自主的に実践していくのだろうか」という素朴な疑問を抱いたのは、自らの経験に即した、ごく自然な成り行きであった。

しかし、この問いの答えを得ることは容易ではない。なぜなら、卒業後の学生を対象として、スポーツ参加や健康・体力づくり実践の様子を追跡調査することが、事実上困難だからである。したがって、実証的な研究を志向するならば、このような問いを立てるべきではない。とは言うものの、この問いは本学における体育の目標に深くかかわる重要な内容を含んでおり、検討に値する。そこで、ある授業の方法や、個人の語りを丁寧に読み解くことは、実証的な研究としての妥当性は欠くものの、大学体育がもたらす教育効果を部分的に示すことができるものと考えた。

以上より、1995年度から2003年度にかけて計7回開講(1998年度、2000年度は開講せず)された自由科目「野外運動(登山)」を事例として取り上げ、(1)授業内容、(2)卒業生(1名)へのインタビュー内容の2点を資料として提示し、自由科目での学びについて検討することを、本報告の目的とする。

## 2. 方法

### 2-1 授業内容

「野外運動(登山)」の授業担当教員(第二筆者)より提供を受けた資料に基づき、授業内容を提示する。

### 2-2 卒業生へのインタビュー内容

「野外運動(登山)」の履修経験がある卒業生(1名)を情報提供者としてインタビューを行い、その記録を再構成して提示する。なお、この卒業生を情報提供者とした理由は、4.において詳しく述べる。

## 3. 「野外運動(登山)」授業内容

### 3-1 学習目標

初中級レベルの登山を経験することにより、登山についての基本的な技能・知識を習得する。また、自然の中での野外運動種目に共通して必要な態度を養う。

### 3-2 授業の構成

いずれの年度においても、ほぼ同じ流れで授業が進められた。

- ①1～2学期の開講であり、週1回(75分)の定時の授業と、4回の山行(集中)で構成される。定時の授業は、山行の準備に当てる(資料1参照)。
- ②1回目の山行は筑波山夜間登山、2回目は上高地、3回目と4回目の行き先は、年度ごとに異なる(資料2参照)。
- ③山行は、4～5名程度の小グループで行う。
- ④毎回の山行後、「そこで私は考えた」というテーマで、レポート課題が課される。レポートは冊子にまとめられ、受講生全員に配布される。

### 3-3 授業における工夫

受講生の立場から見て気づく工夫は、山行

を重ねるごとに、受講生が主体的に関与する部分が多くなることである。

1回目の山行(筑波山夜間登山)ではルートが記入された地図と、行程、持ち物等が書かれた実施要項が配布される。

2回目の山行(上高地)では、班ごとの食料計画が発生する。さらに、食料計画、装備計画、比高断面図、登山および上高地に関連した語句説明などを収録した「パンフレット作り」が、宿題として課される。

3回目の山行では、食料計画に加えて、リーダー、装備係、食料係、気象係、記録係、会計係、医療係、サブリーダーなど、班内の役割分担が提示され、一人一役を担いその責任を果たすことが要求される。

4回目の山行では、食料計画、班内の役割分担に加えて、行程を各班で決め、登山計画書を作成することが課題とされる。

以上より、4回の山行を通して、段階を追って登山についての基本的な技能・知識を習得することができ、リーダーシップや役割を果たすことなど、自然の中での野外運動種目に共通して必要な態度を身につけることができるように工夫されている。

### 3-4 危機管理

毎回、保険に加入するほか、平成15年度以降は、登山行為および運転にかかわる確認・同意・誓約書の提出を求めている。

## 4. 卒業生へのインタビュー内容

### 4-1 この卒業生について

本稿では、この卒業生を赤井さんと呼ぶことにする。赤井さんは、現在大学院に在籍している女性である。筆者からの依頼に対して、快く応じてくださったので、2005年の12月上旬に、約1時間のインタビューを行った。赤井さん本人の許可を得て、その内容を録音させて頂き、逐語に近い形でテキスト化した。それを基に、語りを再構成して提示す

る。

なお、本稿では、「野外運動(登山)」以外の科目については科目A、科目Bなどと表記し、本人が履修した科目名およびその年度を明らかにしないことにする。また、赤井さんの語りの中に登場する人物名は全て仮称を用いた。

赤井さんは、「野外運動(登山)」を2回受講した経験がある。そのほか、体育センター開講の科目を自由科目として多数履修しており、「野外運動(登山)」のほか、科目Aについて2回、科目Bについて3回、科目Cについて3回、科目D、科目Eをそれぞれ1回ずつ受講した経験がある。

こうした背景から、赤井さんは自由科目の授業を接点とした多くの友人があり、その仲間関係を今もなお維持している。

#### 4-2 tsukuyama(つくやま)というネットワークの存在

筆者が、情報提供者として赤井さんを選んだ理由の一つは、「野外運動(登山)」受講経験者およびその友人(一緒に登山やクロスカントリースキーをした仲間)で構成されるゆるやかなネットワーク「tsukuyama(つくやま)」の中心人物の一人であり、彼女のところに多くの情報が集積しているからであった。その意味で、赤井さんはこのネットワークをつなぐキーパーソンであるといえる。

tsukuyamaというネットワークは、メーリングリストのみでゆるやかにつながっている。メーリングリストには、山行やクロスカントリースキーツアーのお誘いが投稿され、それを見て都合が合えば連絡を取り合って一緒に出かける、という仕組みになっている。tsukuyamaというネットワークを創始し、メーリングリストを開設したのは、赤井さんの親友である葵さんであったが、現在は第1回の受講生である森さんがメーリングリストの管理を受け継ぎ、今に至っている。

#### 4-3 インタビューの概要

以下の質問項目を準備し、インタビューを行った。所要時間は約1時間であった。

- (1)登山を受講した理由。
- (2)登山の授業で覚えていること。
- (3)登山での仲間関係について感じる事。
- (4)自分にとっての登山の意味。

インタビューは、筆者が質問項目のメモをあらかじめ作成してインタビューに臨む半構造化面接の形式をとったが、結果的にはかなり自由に話していただくことになった。

#### 4-4 インタビューの内容

##### ①登山を受講した理由

〈受講前の登山経験は?〉高校の卒業旅行で屋久島に行った以外は全然。ずっとやってみたくって、虎視眈々とチャンスをねらってた。すきならば、みたいな。〈連続で履修したのはなぜ?〉連続でとろうと思ったのは、(1回目)がすごく楽しかったってのもあったんだけど、学べるのがすごくいっぱいあるぞということに気づいたから。野外から、学べるのがすごくいっぱいあるということに突如として気づいたから、で、これはとらにゃあ、みたいな。〈野外っていうのはどういう意味での?〉考え方、とか。アウトドアをやる人の、独特な考え方が、すごく印象的でした。〈たとえばどんな?〉グループで山登りするときが一番弱い人を、リーダーの2番目に持ってくるとか。そうすれば、全然問題なく物事が楽しめるっていうか、弱い人を守ろう、サポートしようというような考え方とか。

##### ②登山の授業で覚えていること

###### 【筑波山夜間登山】

…あれはあれで、強烈な体験でしたね。まず夜中に歩く、って、そんな夜逃げじゃあるまいし、って思ってたんですよ。でも歩いてみると、でも、すごい、すばらしいなと私は思って。一人だったら絶対できないけど4

人仲間がいるから歩ける、っていうか。なんか、ああいうときって、話すんですよ。いろんな話を聞いているとすごいおもしろくて。全然、夜逃げじゃなかった。山頂が寒かったの覚えてます…

### 【上高地・西穂独標】

…今思っても、その当時自分が何考えてたかっていうと、すごい感動してたんですよ。世の中ってこんなにきれいだったんだ、って。すごい感動してました。すごい変な、宗教的な話なんですけど、ケヤキが紅葉するのは、温度変化とかそういうことなんですけど、ケヤキにはケヤキの生きるための知恵とか、戦略とか、そういうの、普段ぜんぜん気づかないじゃないですか。でも山に登ると、自分が持つてる気と、ケヤキならケヤキが持つてる気が、近くなるので、なんとなく、わかるんですよ。そういうことを考えちゃうんです。木々は、すごい生きようと懸命で、木々を支えるための水があって、光があって、空気があるんですけど、ちょっとずつ支えあいながら、世界ができていて、で、今私はその世界の一員で、ちょっと高いところに登って世界を眺めている自分がすごいって。おー、私すごいところにいるぞ、みたいな。これは、5月に上高地に行ったときに感じました。もう、勝手に大感動…

### 【夏山(甲斐駒ヶ岳・仙丈岳/白馬岳)】

…今でも忘れられないんですけど、人生初の3000メートルが、仙丈ヶ岳だったんですよ。で、雨だったんですよ。で、人生初の3000メートルを超えたのに、激寒で、なんかラーメン食べるとか言ってたんですけど、寒すぎて、それどころじゃなくて。そのとき人生ではじめて、夏山でも寒いということを経験したんですよ。で、翌日は甲斐駒で。翌日は晴れたんですよ。スケジュールが、朝の3時起きで、4時出発。サシゴってやつで。それもはじめてで。それですごい印象に残って。結構、しばらく歩いてご来光だったと

思うんですよ。すごい感動的で…

…2年目は白馬だったんですけど、天気はよかったんですけど風が強くて。シティーオブエンジェルって映画あるじゃないですか。天使たちは毎朝必ず海辺に集まって日の出が始まる、一日が始まる音を聞くっていうのが、天使の日課なんだって。で、それとおんなじことを、白馬で体験して。日の出のとき、白馬の稜線ってわりと切り立ってるので、風が吹くと稜線にあたるのか知らないんですけど音がするんですよ。ヴォーンって。それは、はじめて聞きました。あ、風にも音があるんだ、って。白馬っていうと、大雪溪なんですけどそのイメージなくて、風の山だって…

### ③登山での仲間関係について

〈人とのつながりってというのは、普段の研究室での関係とは、なにか違うの?〉違う。〈どんな風に違うんだろう。〉たとえば、葵(共に山に登ってきた親友)とわたしの関係だったら、葵が怪我をしたら、わたしは何を差し置いてでも、葵を背負って下りる。そのくらのことはすると思うんですよ。結束が固いのは、同じステップを登ったからです。もし研究室の人が、研究で苦しんでいても、それは、私がどうこうすることでもない、背負って山を下りるような、そういうことは絶対にしない。なんか自分で解決方法があるんじゃないの、みたいな。全然関係が違う。〈一緒に山に行ったら、葵さんじゃない人であっても、そうする?〉そう。だから一緒に山に行けるっていう。〈あー、確かに。〉研究室だったら、基本的に仕事の要素。山だと個人の趣味、ですよ。なので、あっちはやらねばならぬという義務感なので、あんまりチャレンジするとか、楽しむとか、世の中はすばらしいとか、そういうことはあんまり思わないんですよ。山だと、自ら挑戦することが、すごいいいことに思えてくる。研究室でも、なにかやろうというのはあるんですけど、どうしてもそこに義務感とかあるので、

失敗しちやいけないとか、迷惑かけちやいけないとか、そういうのあるんですよ。なので、同じチャレンジ、ということで比べると、富士山にチャレンジするときのほうが、わたしはすごい楽しいです…

#### ④登山の意味

〈登山の授業は、当時のあなたにとってどんな意味を持っていたと思いますか〉はじめの授業は、わたしにとって人生を変えるくらいの転機、今までこんな世界があるって知らなかった。〈山、の世界が？〉山に限らず、人生の楽しみ方が。〈それまでどんな楽しみ方だったの？〉たとえば、クリスマスだったら、適当にゴハン食べて、ケーキ食べて、じゃないですか…(続いて、野外で過ごした楽しいクリスマスの思い出が語られる)…あと、なんていうのかな、失敗することは悪いことじゃないし、自分が弱いということも悪いことじゃない。まあ、あんまりいいことじゃないにしろ、別に恥じたりする必要はない。人は誰にも得意不得意があって、それを補いあっていけばいいじゃん、みたいな。〈それは、今振り返ってそう思うこと？〉そうかも。…(中略)…〈どうして山に登るんだろう？〉楽しいから。楽しいからには、なにか理由があるはずですよ。なんで楽しいんだろう。それが結構ミソなんですよ。やっぱり、先生がおっしゃっていたように、非日常世界に入り込めるってところが大きいかも。二つ目には、自分でどこかそういう冒険を求めているところがある。冒険っていうか、チャレンジ。味を占めました。〈どんな、味を？〉自分を取り巻く自然が、非常にすばらしい、感動しちゃうーっ、ていうのと、あと、人とのつながりが、すごい、いいなあって…

### 5. 考察

#### 5-1 登山特有の学びとは？

自由科目は、必修科目によって学んだ学習

内容を基礎として、さらに幅広い教養としてのスポーツや健康・体力づくりの理論を習得するためのものとして位置づけられている。

ここでは、既に提示した資料を総合し、登山を通して学生が学び取ったと考えられることを考察していく。

#### 5-2 リーダーシップへの気づき

授業の内容としては、3回目山行以降、班内の役割分担を明確にし、班員各々が自己の責任を果たすことが課題とされている。

赤井さんは、自分自身のリーダーシップについてははっきりとは言及されなかったが、彼女の表現を借りれば「考え方、とか。アウトドアをやる人の、独特な考え方」である。これについて、赤井さんは「野外から学べるということがいっぱいあるということに突如として気づいた」と語っている。このことは、登山を通してのリーダーシップへの気づきと理解することができる。

#### 5-3 自然に対する感受性の開花

赤井さんの語りから、彼女自身が自然に対する感受性が豊かな人であることが察せられる。数年前の登山での感動が、まるで昨日の出来事であったかのようにいきいきと伝えられていることは、注目に値する。

たとえば、「山に登ると、自分が持つてる気と、ケヤキが持つてる気が近くなるので、なんとなく、わかるんですよ」、「木々を支えるための水があって、光があって、空気があるんですけど、ちょっとずつ支えあいながら、世界ができていて、で、今わたしはその世界の一人」、「あ、風にも音があるんだ、って。白馬っていうと、大雪溪なんですけどそのイメージなくて、風の山だって」など、その表現された内容から自然に対して彼女が感性を開いている様子が感じられる。

授業の内容としては、自然に対する感受性に直接働きかけるような工夫はない。

ただ、活動時間帯(例：筑波山夜間登山では山頂で日の出を拝む)および活動地域(2回目以降の山行は優れた景観が残る自然地域で実施している)の設定が巧みである。このことは、登山という行為を通して自然に対する感受性を研ぎ澄ますことに、少なからず貢献しているものと思われる。

#### 5-4 人間関係の深化

赤井さんの語りから、登山の仲間どうしの関係のあり方を察することができる。

「人とのつながりが、すごい、いいあって」と直接言及しているほか、「一人だったら絶対できないけど4人仲間がいるから歩ける」、「ああいうときって、話すんですよ。いろんな話を聞いているとすごいおもしろくて。」、「葵(ともに山に登ってきた親友)わたしの関係だったら、葵が怪我をしたら、わたしは何を差し置いてでも、葵を背負って下りる。そのくらいのことはずると思うんですよ。」などの語りから、仲間どうしの信頼関係が登山を通して醸成されていることが感じられる。

授業の内容としては、4～5名の小グループでの活動を通して、体験を共有し、自然の中でともに感動を味わうことが、親密な人間関係の形成に貢献しているものと思われる。

#### 5-5 価値観の転換

赤井さんの語りから、赤井さん自身に価値観の転換が起こったことが感じられる。「あと、なんていうのかな、失敗することは悪いことじゃないし、自分が弱いということも悪いことじゃない。まあ、あんまりいいことじゃないにしろ、別に恥じたりする必要はない。人は誰にも得意不得意があって、それを補いあっていけばいいじゃん、みたいな。」と、自分の考え方のポジティブな変化に触れているが、その一方で、「山だと、自ら挑戦することが、すごくいいことに思えてくる。

研究室でも、なにかやろうというのはあるんですけど、どうしてもそこに義務感とかあるので、失敗しちゃいけないとか、迷惑かけちゃいけないとか、そういうあるんですよ」と、日常生活での価値観と、登山時の価値観の隔たりが大きいことに言及している。

授業の内容としては、「そこで私は考えた」というレポート課題が、登山経験後の内省を促し、価値観の変化への気づきに貢献しているものと思われる。

#### 5-6 意図と非意図のバランス

以上、登山特有の学びとして、(1)リーダーシップへの気づき、(2)自然に対する感受性の開花、(3)人間関係の深化、(4)価値観の転換、の4点についての考察を試みた。

登山を通して、こうした学びがあることは赤井さんの語りから理解することができた。しかし、これらの学びの全てについて、授業を構成する側が明確に意図しているとは思われない。登山は自然の中で行う活動であり、自然に任せる部分が多い。赤井さんの語りからも、自然の中での偶然の出来事が人の心を動かすことがうかがわれる。

これらのことから、登山特有の学びは、明確にその効果を意図して構成されている部分(主に課題として提示される)と、そうでない部分の両方があるからこそ生起するものと理解することができる。

### 6. まとめ

本報告の目的は、自由科目「野外運動(登山)」を事例として取り上げ、(1)授業内容、(2)卒業生へのインタビュー内容、を資料として提示し、自由科目での学びについて検討することであった。

検討の結果、卒業生の語りの内容から理解される登山特有の学びとして、(1)リーダーシップへの気づき、(2)自然に対する感受性の開花、(3)人間関係の深化、(4)価値観の転

換，の4点を見出し，授業内容と関連づけての考察を試みた。

本報告は，一人の卒業生の語りを中心として自由科目「野外運動(登山)」における学びについて考察したが，野外運動種目を教材とし

た大学体育授業の学びについて追求するためには，方法として不十分である。今後は，教える側と学ぶ側の双方に対し，詳細なインタビューを行うなどしてデータの追加を行い，さらに考察を深めることが必要であろう。

## 資料1 野外運動（登山）のシラバス

### 野外運動（登山） Outing Sports (Mountaineering)

1単位

対象学類（時限） 科目番号 全学群・全学類・全学年（1・2学期、 2635113  
金6および集中）

担当教官 橋 直隆  
実施場所 サイクリング実習棟（金6）、現地山岳  
学習目標 初中級レベルの登山を経験することにより、登山についての基本的な技能・知識を習得する。  
また、自然の中での野外運動種目に共通して必要な態度を養う。

評価方法 出席を重視する  
参考文献 ・山と渓谷 月刊雑誌 山と渓谷社  
・岳人 月刊雑誌 東京新聞出版局  
・山岳活動 野外運動研究会編 ベースボール・マガジン社

回	授業内容
1	受講者決定、オリエンテーション（4月11日、サイクリング実習棟）
2	装備等の説明、（テント、ガスコンロ等）
3	筑波山夜間登山の計画と準備
4	筑波山夜間登山の出発直前注意および確認
5	筑波山夜間登山のまとめ、2回目山行の計画
6	2回目山行の準備（食糧、装備、しおり作り）
7	2回目山行の直前準備（買い出し等）
8	2回目山行のまとめ、3回目山行の計画
9	3回目山行の準備
10	3回目山行の準備
11	3回目山行のまとめ、4回目山行の準備
12	4回目山行の準備
13	4回目山行の準備
14	4回目山行のまとめ（以上で授業は終了する）
15	
16	登山（集中）の予定
17	1. 5月9日（金）～10（土） 徹夜 筑波山夜間登山（大学起点）
18	2. 5月30日（金）～1（日） 2泊2日 上高地方面
19	3. 8月4日（月）～7（木） 3泊4日 立山方面（予定）
20	4. 9月26日（金）～28（日） 2泊2日 尾瀬方面（予定）

備考 <受講条件> ①1回目授業で実習費3000円を支払える。 ②学生教育研究災害保険に加入している。  
③下記の授業にすべて参加できる。 ④個人的装備（雨具、ザック、寝袋等）を準備できる。  
<その他> ①毎週の授業は山行の準備のため欠席は認めない。 ②定員は20名とする（余裕があれば大学院等の受講を認める）。 ③山行はすべてテント泊とする。

## 資料2 山行記録

（全年度共通）	第1回	筑波山夜間登山	第2回	上高地・西穂独標
1995年度（平成7年度）	第3回	富士山	第4回	八ヶ岳
1996年度（平成8年度）	第3回	槍ヶ岳	第4回	尾瀬（燧ヶ岳）
1997年度（平成9年度）	第3回	北岳・間ノ岳	第4回	会津磐梯山・吾妻山
1999年度（平成11年度）	第3回	唐松岳・五竜岳	第4回	鳳凰三山
2001年度（平成13年度）	第3回	甲斐駒ヶ岳・仙丈岳	第4回	妙高山・火打山
2002年度（平成14年度）	第3回	白馬岳	第4回	瑞牆山・金峰山
2003年度（平成15年度）	第3回	劔岳・立山	第4回	尾瀬（燧ヶ岳・志仏山）